

1 研究題目

文学教材を通して対話できる児童・生徒の育成

2 はじめに

本研究会では、昨年度から「文学作品」を中心に据えた研究を進めている。国語の授業において、児童・生徒は「教材」「他者」「自分自身」と「対話」しながら文学作品を読み進めていく。「教材との対話」では、登場人物や場面の様子を読み描き、「他者との対話」では、自分の考えと比べて読みを広げたり深めたりする。そして、「自分自身との対話」で自分の考えを確かなものにしていく。「対話」が児童・生徒にもたらす影響は非常に大きいと考えられる。今年度も「対話」を大切にしながら、教師それぞれの色を出した授業実践に挑戦することで、今後の研究の土台を築くことを目標に、研究主題を設定した。

3 研究経過

- (1) 会を定期的に設け、学年ごとに分かれて教材研究や実践報告をした。
- (2) 学年ごとに1・2学期の取り組みを中間発表で報告した。
- (3) 報告会を行い、次年度のテーマについて話し合った。

4 研究の概要

5月	各部に分かれて情報交換、今後の計画
6月	各部に分かれて教材研究・実践報告
9月	各部に分かれて教材研究・実践報告
10月	各部に分かれて教材研究・実践報告、中間発表の準備
11月	中間発表（各部ごとの実践と成果について）

月ごとの研究テーマは表の通りである。各学年に分かれてテーマに沿った教材研究を行い、それぞれが創意工夫を凝らした授業実践の報告を行った。研究会では、互いの実践資料を持ち寄り、熱心に話し合う様子が多く見られた。そこで話し合った内容を学年ごとに用紙にまとめ、それらを集約したものを次の研究会で配付することで、全ての教師が他学年の行った教材研究や実践報告から学びを得ることができた。11月の中間発表では、それぞれの学年の実践報告を聴き合い、質疑応答や話し合いを行った。学年ごとにレジュメが用意されていたため、興味をもって他学年の実践に耳を傾けていた。今後の研究会では、11月以降の授業実践成果を共有し、それを元にこれからの文学教材の授業を練り、さらに「対話」という観点の研究を進めていく予定である。

(1) 小学校 1・2 年

「おおきなかぶ」

挿絵や生活で朝顔を育てた経験からイメージし、おじいさんになりきることで音読に変化が生まれた。音読や動作化で読みを深めることにつながった。言葉だけでは読み方を伝えることは難しいので、体験を交えることで深まりにつながった。

「スイミー」

「さびしかった」や「かなしかった」など、直接表現されている箇所だけでなく、スイミーのセリフや様子にも注目させた。さらに、挿絵や比喩表現が美しい教材でもあるため、海の青みにも注目することで、スイミーの様子や心情の創造が膨らみ、深まりにつながった。

(2) 小学校 3・4 年

「ちいちゃんのかげおくり」

初めての戦争教材だからこそ、教室内や廊下に教材に関する写真や、戦争の背景を知ることができる本や資料を置いた。また、音読の前に情景や状況、人物像を共有することで、より物語の世界に入り込むことができた。聴き合いの中から本文に戻ろうとする児童が増えた。

「ごんぎつね」

音読を何度も行い、情景や様子を読み描かせる。ごんの人物像が分かるところや気になるところに線を引き、その文章について対話をする場面を増やすことで、考えに深まりをもたせたり、目当てに沿った振り返りを自分の言葉で表現したりすることができるようになった。しかし、対話をする時間を確保しようとする、多くの時間を音読に使うことができなくなってしまう。対話と音読のバランスを考える必要がある。

(3) 小学校 5・6 年

「たずねびと」

資料の効果的な提示により、主人公と同じタイミングで情報が伝わった。既習の内容が書かれた拡大紙を使い、場面ごとのつながりを意識して読み深めることができた。Teams の機能を使って音読を録音することで、音読で表現ができる児童の育成につながった。

「やまなし」

比喩やオノマトペ、色彩語などの表現に注目して読むことで、細かい情景の違いを想像する楽しさを感じられていた。文章を分析せず、自分だけの世界を読み描けるように何度も音読をさせることで、自分の考えをもてる児童の育成につながった。

(4) 中学校 1・2・3 年

「大人になれなかった弟たちに…」

miro を使用した協働編集を行った。生徒は学びたい課題を自分で選択し、考えを書き込んでいく。協働編集のため、同時に全員の意見を参照することができ、同じ考えをもっている生徒同士で聴き合いをしたり、異な

る考えを持つ生徒に詳しく考えを聴いたりする様子が見られた。しかし、書くことに意識が行ってしまい、聴き合いの中での深まりがあまり生まれなかった。タブレットと対話のバランスを考える必要がある。

「盆土産」

生徒の疑問を出発点として内容を読み進めていくことで、主体的な活動が増えた。時代背景をつかむことに手間取ったり、知らない単語に時間をとられたりと、時間が足りなかった。また、通読させるか、場面読みをさせるか、生徒の発達段階や単元によって判断する必要があった。計画的な教材研究が求められる。

「故郷」～作品の主題をつかむ～

難解な文章で表面的にしか読解ができないため、時代背景を抑えてから教材に取り組み、最終的に批評文を書かせた。タブレットで時代背景を調べる生徒が多く、背景を知ることによって魯迅の言いたいことが理解できるようになった反面、解説を見てしまい、自分で考えない生徒がいたため注意が必要。批評文も作成する際、対話を通して他の生徒の作品を参考にすることで深い学びへと繋がった。生成 AI を参考にする生徒もいたため、今後 AI とどのように関わっていくのか考える必要がある。

(5) 国際

「音読や動作化を通して言葉の意味を捉える」

教師の後に続いて読ませたり、一人で字を追いながら音読をさせたりすることを繰り返す。理解できていそうな言葉でも確認したり動作化を取り入れたりすることで、登場人物の様子や心情を考えることができるようになった。理解できたことを元に、自分の考えたことを母語や日本語など、自分の言葉で表現できるようにする。

5 今後の課題

学年別で教材研究や実践報告を行うことで発達段階に応じた取り組みが分かり、研究が進むにつれて土台作りはできたように感じる。さらに児童・生徒が「対話」できるようにするためにも、発達段階に応じた指導内容や方法を追求していく。そして、義務教育9年間を通した一貫性のある文学教材の指導を目指して、今後も教材研究や実践報告を重ねていきたい。